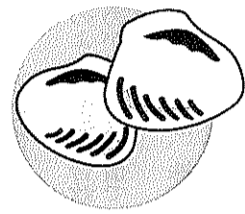


街の活力は
自立と創造から

あのまちこの街

商店街再生は地域づくり

空き店舗対策に工夫 野菜直売所で賑わい



木更津本町商店街振興組合
千葉県木更津市

組合が土地・建物を購入し 「ふれあいプラザ」を直営

商店街から生鮮品が消えた

アクアライン開通で注目を集めたのも東の関、平成十二年に海側(西口)駅前にあつた木更津そごうが倒産。その後一年ほどでダイエー、西友など中心部にあつたすべの大型店が撤退した。空き店舗ばかりが目立つ本町商店街の街区。来街者も減る一方で深刻な状況に陥っていた。商店街に生鮮食品を販売する店舗までもが無くなってしまったのである。

住民は遠くのスーパーまで出かけなければならなくなった。車を運転できないと行けない郊外型店舗が多く、高齢者や交通弱者は大変な不便を強いられていた。そこで同商店街では地域のために産直生鮮市場の開設を検討。JA木更津市と提携し、生産農家と直接契約することとした。当時、街区には二十あまりの空き店舗があり、そのひとつを利用することにした。対象となったのは敷地百六十五坪、建物は二階建て百六十坪の元産物店。本町商店街がこの土地と建物を買い取ったのだ。

土地代約五千万円、総事業費は千二百九十八万円。県のぎわい店舗創出事業(平成十四年度)から各六百万円と、商店街の資産(昭和五十年代に運営していた駐車場)の処分代金を充て、組合員の負担は必要としなかった。

店舗の改装を終え、産直生鮮市場「ふれあいプラザ本町」を開設。商店街再生へ向け、活性化の起爆剤にしようという機運が高まった。

商店街に産直市場を作る

日曜定休で午前八時午後七時まで営業。農家七十軒と提携しており、一日当たり二十軒ほどが手に持っている分を目安に商品をそろえる。同プラザは毎日利用できる生活密着型の売場として、野菜・果物・米・米穀・惣菜などの加工食品、鶏卵、花弁、本加工品、手芸品・民芸品を扱う。商店街と契約したのは、木更津、袖ヶ浦、富津、市原などの農家と食品製造会社を含めた約百二十業者。契約農家は小規模な農家が中心である。農家が自分で値段を付けることで相場より二割程度安く提供できるのが強み。



本町商店街が所有・運営する「ふれあいプラザ」



「ふれあいプラザ」には生鮮品・日用品などが数多く並び



自然食品食堂は来店者のコミュニティスペース

来街者増加で波及効果も

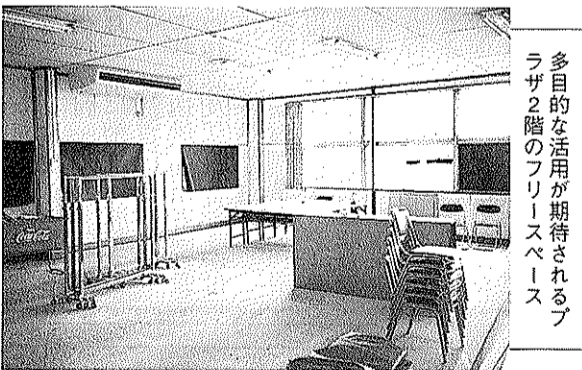
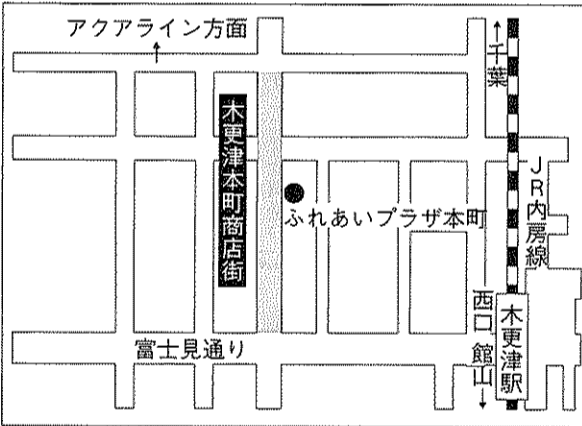
商品納入業者は平成十五年四月現在で、JA関係者七十九名、その他八十八名にもなった。商店街への来街者は一日五百七十八人程度増加した。既存個店への波及効果もあり、来街者が増え売り上げも増加傾向にある。テレビ・新聞雑誌で取り上げられたため、各方面から多くの視察が訪れている。商店街に不足していた業種が、地域住民など消費者からは感謝の声が多数寄せられている。特に米は地元のコシヒカリを目的で精米し、これが好評を得た。生産農家は消費者のニーズを直接知ることができた。さらに地産地消の仕組づくり、JA系統から販売先のチャネル拡大、農家の高齢化対策など今後の農業経営の参考になることと喜ばれている。この事業を通じて、商店街組合員の組合事業への参加意識が高揚したのも大きな成果である。

空き店舗が無くなる日へ

ふれあいプラザは「まなま」目玉として、地元産の生鮮野菜(木更津は野菜の宝庫である)を取りそろえることとした。農家の朝採り野菜を販売するにあたり、同年四月から試験的に仮営業した。感触が良かったことと自信につながった。プラザの二階は百人は収容できる広さ。今後、地域づくりの視点を持った空き店舗対策は、商店街を再生する。

「ふれあいプラザ」は「まなま」目玉として、地元産の生鮮野菜(木更津は野菜の宝庫である)を取りそろえることとした。農家の朝採り野菜を販売するにあたり、同年四月から試験的に仮営業した。感触が良かったことと自信につながった。プラザの二階は百人は収容できる広さ。今後、地域づくりの視点を持った空き店舗対策は、商店街を再生する。

木更津市は古くから東京湾横断の玄関口として栄えてきた港町である。江戸時代には周辺の物資を搬出する海上輸送の拠点として現在でも京浜地区との経済・文化の交流に重要な役割を果たしている。木更津市と川崎市は東京湾を挟んで僅か十五キロしか離れていない。東京湾アクアラインが開通し一躍脚光を浴びた当時、市内中心部には大型店が続きと進出し、その数は七店舗に上っていた。しかしバブル崩壊とともに今度は次々と撤退していき、街から店が消えてしまった。この様な状況に商店街としても手をこまねている訳にはいかなかった。平成十四年十月に生鮮野菜を中心にそろえた「ふれあいプラザ」



多目的な活用が期待されるプラザ2階のフリースペース



店舗裏の空き家を高齢者の支援施設として賃貸

コラム

木更津の地名の由来に欠かせないのが、日本武尊(やまとたけるのみこと)と弟橘媛(おとたちはなひめ)の悲恋の伝説。みこがひめを偲んで、しばしこの地を去らなかつたので「君去らず」と呼ぶようになり、それが「きざらず」になったとか。市内中心部には古代のロマンが蘇る古墳や博物館などが集まっている。